

日本人学生の英作文における文章パターンと 思考過程および英語教授法への応用

大 石 晴 美

Rhetorical Patterns and Processes Extant
in the English composition of Japanese students
and
Its Implications for TEFL in Japan

Harumi Oishi

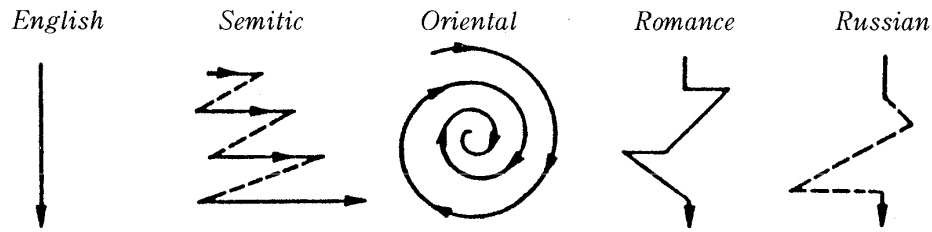
はじめに

「日本人は何が言いたいのかよくわからない。」英語を母国語とする教師からよく耳にすることである。アメリカの大学の付属機関に設置してある語学研修のプログラムでのクラス分けテストで、日本人学生の文法力、読解力はかなり高く評価されるが、作文力は予想以上に低く評価される。このアンバランスな英語力のため、クラス分けには、アメリカ人教師達は頭を悩ませているようである。中学生から6年以上も養ってきた豊富な英語力が、いざ表現するとなるとなぜ死んでしまうのだろうか。なぜ理解されないのだろうか。いかに日本語から英語、英語から日本語への橋渡しをしたらよいのだろうか。

本稿では、こうした課題に焦点をあて、文化とレトリックの相関関係をふまえて、英語と日本語のエッセイの書き方を比べたい。さらに、アメリカの大学で語学研修中の日本人学生による英文エッセイを分析し、彼らへのインタビューを通してどんな問題を抱えているのかを認識し、どのような過程でエッセイの書き方の授業を進めたらより効果的かを考えたい。

1. 文化とレトリック

文化が違ふと考え方が違ふ。レトリックも違ふ。レトリックとは弁証法という意味であるが、Robert Kaplan は“Phetoric is a mode of thinking...”つまり、レトリックというのは言葉で表されるというより、人々の考え方そのものなのであるといい、5つの言語のタイプにおいてレトリックの違いを説明している。そこでは、英語、セム語、東洋語（中国語、韓国語）、ロマンス語、ロシア語のレトリックは次の図のように表せると言っている。



この図からわかるように、レトリックは、それぞれの言語を使う文化によって特長をもっている。日本語と英語の違いも多くの人類学者や社会学者やコミュニケーションの専門家が指摘している。例えば、Dean Barnlund はこう言っている。

It is not simply that people speak in different tongues but also that they see differently, feel differently about their experience. "If by some miracle, American and Japanese were to wake up one day find ourselves talking the same languages," observes George Packard, "we would still be faced with the problem of our massive ignorance about each other, we would still have difficulty in knowing what to communicate because we have so much to learn about what motivates the other."

もし、日本人とアメリカ人が同じ言葉を話すようになったとしても、相互理解の問題は残る。すなわち、単に、すぐれた言語能力をそなえていてもコミュニケーションが円滑に運ばないことがあるということだ。意志伝達をしようとするとき自国の表現、ルールをそのままあてはめ、誤解が生じることがしばしばある。そういった、問題を解決するためには、他の言語で自己表現をするとき、その国の人々の物の考え方、レトリックを前もって心得ておくべきである。

2. 英文アカデミックエッセイの書き方

自己表現を重視しているアメリカ教育に於て、エッセイの書き方は、多くの言語学者、教育学者たちによって論じられている。例えば、Joy Reid (1963) によれば、エッセイは、introduction, body, conclusion の3つの部分からなっているといい次のように定義している。

1. Introduction…一般的なことからはじめ、読み手の興味を引くように展開し、主旨を論理的に述べる。
2. body…主旨に直接関係のあるトピックセンテンスから始め、そのトピックセンテンスの裏付けをする。

3. conclusion…前に述べた事を同じ言葉を繰り返さずまとめる。読者に対して、アドバイスをしたり、未来を予測したりする。また、書き手の主旨は、正当だと言うことを示す最後のチャンスである。

また、文章の構成法や好みは、文化によって異なると言った Kaplan も英文構成は演繹法で展開されているといい次の様に述べている。

The thought pattern which speakers and readers of English appears to expect as an integral part of their communication is a sequence that is dominantly linear in its development. An English expository paragraph usually begins with a topic statement, and then by a series of subdivisions of that topic statement, each supported by examples and illustrations, proceeds to develop that central idea and relate that idea to all the other ideas in the whole essay, and to employ that idea in its proper relationship with other ideas, to prove something, or perhaps to argue something.

英文エッセイを読むアメリカ人にとっては、はっきりと演繹法で、書かれているエッセイが読みやすいようである。日本人学生が、同じことをこのスタイルにしたがわず、起承転結、帰納法等、日本語的論理の展開に基づいて書いても、主旨がはっきりしないという評価をされる。現に、ある正規日本人の学部留学生は評価がCとついでにきた課題を Reid のような英文文章構成法に書き直しをして提出したところ、大変分かりやすくなったと言うコメントをもらい A- と評価されたようだ。

つまり、英文での論理的展開というのは、“linear”（直線的）であり、できるだけ書き手の言いたいことがはっきりと分かるように直接表現することがテクニックである。

3. 日本文エッセイの書き方

英語に比べ、日本語のエッセイの書き方はあまり論じられていないが、近年、大学入試で、小論文を課す大学が増え文章の書き方への関心は高まっている。

日本語での典型的なエッセイのスタイルは帰納法と起承転結の2つである。帰納法とは、主旨をエッセイの最終部分で直接または、間接に表現する方法である。序文で時間、場所等のインフォメーションを与え、本論で、主旨に関する説明や具体例を、結論では、筆者の主旨や感想を述べたり、今後の課題として問題提起をするといった形式である。

もう一つの形式は起承転結である。それぞれのパートは、次のように定義される。

- 起 イントロダクション。主旨は直接言わず、題材の背景を説明するだけである。
承 イントロダクションを発展させ、クライマックスになる転への橋渡しの役割をする。

転 クライマックス。筆者の主旨を読者に伝えるための一番重要な部分である。
 結 筆者の主旨を直接または、間接に表現する。読者へのアドバイスや質問をなげかける場合もある。

一般的に、日本人は、ストレートに自分の意見、感情をあらわさない。相手を説得することが中心で、言葉を通して相手をどれだけ説得できるかが成功の秘訣であるアメリカ人と対比的で、日本人の生活の中では、レトリックを利用して自分の主張、感情を押し当てて相手を意識的に説得しなければならないということはあまりないからだろう。また、そのように教育がされていないからだろう。むしろ、相手を説得するということよりは、相手の感情を害さずにうまく調和し、人間関係を円滑に運ぶ役割をするのが日本におけるレトリックの機能である。つまり、言語以上に非言語の手段がコミュニケーションで必要になる。例えば、「腹芸」とよばれる独特のコミュニケーションの手段を利用して人間関係を円滑に運んでいる人々もたくさんいる。

エッセイにおいても、間接的に本題に触れ、読者に行間の意味を読み取ってもらうように書くことが、日本文エッセイの書き方のテクニックである。こうしてみると、Kaplan の言う中国と韓国の円を描くように話題をはじめ最後に本題に触れるというオリエンタル調のレトリックに似ているといえる。

4. 日本人学生の英文エッセイの特徴

多くの言語学者や教育学者は、すでに、日本人による英作文の特徴を分析している。英語を母国語とする読者にとっては、日本的考え方で書かれたエッセイは、論点がはっきりしないようだ。例えば、Hinds は日本人の書くエッセイは、“lose semantic cohesiveness” 論理的でなく一貫性がないといっている。また、Harder は、次の様に述べている。

The central idea is usually vague or only loosely connected with most of the topic in the essay; if it is stated at all, it usually appears at the last sentence, more often as an afterthought than a result of the previous discussion.

文章が断片的で主旨があいまいである。一番重要な主旨は、書かれていたとしても一番最後にくるのが特徴だと批判している。

このように、日本人は、英作文をする際にも日本文化の影響を受け、日本的思考方法、文章形態を応用してしまいがちである。そのために、英語を母国語とし英語的論法をもっているアメリカ人にとって、日本人の書く文章は大変読みにくく映るのだろう。

5. 日本語と英語のレトリックが違うわけ

こうした日本語と英語のレトリックの違いは、どこから来るのだろうか。それぞれの文化の違いから来るのだろうか。説得を重視するアメリカのレトリックに於ては、読み手を納得させるのは、書き手の役割である。したがって、自分の考えを客観的、論理的表現ができなくてはならない。そのため、たくさんの経験談や事例をあげて証拠としてサポートすることが求められる。

これに対し、日本語のレトリックでは、読み手への配慮が中心で、一つの言葉、表現方法をいかに理解するかは、読み手の役割である。また、コミュニケーションに於ては、主観性を大切に、曖昧性の中からいかに読者に主旨を読み取らせるかが書き手の役割である。

Hinds は、日本語での書き手と読み手の特性を次の様にのべている。

In Japan, it is the responsibility of the listener (or the reader) to understand what it is that the speaker or author had intended to say. [Japanese readers] anticipated with pleasure the opportunities that such writing offers them to savor this kind of "mistification" of language.

では、どうしてこの書き手と読み手の役割の違いができたのだろうか。英語は国際化の進む現代に於て世界語になりつつある。今や、英語を公用語やビジネスの場でコミュニケーションの手段として使っている人々は世界の人口の3分の1にまでのぼる。

文章等のメッセージを読み手が一番理解できる時というのは、内容と読み手の知識、認識 (schema) が一致したときであると Flower と Hayes が言っているが、英語のように schema の違う世界各国の人々に使われ、情報をできるだけ正確につたえる必要性のある言語は、明確性、客観性の高い表現が要求されるのだろう。

一方、日本語は日本でしか使われていない。小さな島国の単一言語しか使わない日本に住む単一民族である日本人は、ほとんどが同じ schema をもっていると言えよう。そのため、少しぐらい曖昧にものをいったり文章を書いたりしても相手に通じてしまう。また逆に、その曖昧さ、細かなニュアンスによって読者の主旨をよみとらせることが文章を書く技術だとも言える。

6. 日本人学生の英作文分析

米国カリフォルニア大学バークレイ校で1991年に開かれた夏期英語集中講座での日本人学生30名のプレイズメンテスト (クラス分けテスト) のエッセイ部分を集めタイプ別にわけ分析してみた。学生達はすでに日本で、6年以上の英語教育を受けたものがほとんどで、アメリカの大学および大学院に入学することが語学研修の目的である。

エッセイの課題は「なぜバークレイにきたか、理由を説明せよ」で、時間制限は30分。エッセイのタイプは次のように分けられた。エッセイ例は、学生のエッセイを修正せずそのまま抜

き書きしたものである。アメリカ人教師の評価では、タイプA～Eの順に上級から初級に評価されている。

タイプA 演繹法を用いたエッセイ 18%

例 *There are three reasons why I chose to come to Berkeley this summer. Two of three reasons are related to my graduate study, which will begin from this fall. The other reason is related to the reputation of Berkeley as an international university.*

The first reason why I chose to come to Berkeley is that I would like to get accustomed to the life at UC Berkeley by the end of August when the fall semester of the graduate program begins. I am getting to start my graduate study at Berkeley from this August. They said that once the fall semester begins, I will be extremely busy and will not be able to take time to go shopping and hanging around the campus. I wanted to get used to this campus studying at ESL this summer.

The second reason why I chose to come to Berkeley is that I have to take preparatory course in mathematics offered by department of Economics. The course begins at the beginning of August, so it was impossible for me to go to another school to take 8 week English course.

The third reason why I chose to come to Berkeley is that I was recommended to go to summer session in Berkeley by some of my American friends. He said Berkeley was famous as an international university and offered excellent language program. Actually, one of the friends who recommended me to go to Berkeley studied Japanese there. The fact that he speaks very good Japanese demonstrated the excellence of the program.

タイプB 帰納法を用いたエッセイ 38%

例 *First of all, last semester, I attended English Language Program in Berkeley. When I was studying there, I heard about this program from my teacher. According to what he said, this program is harder than ELP and the students need to study very much. Because of my future plan, I really need to study English harder than now.*

The second of all, I have a plan to go to graduate school in the U. S. so I want to be close to the campus which has an academic atmosphere. For example, to be close to the university students makes me encourage myself to study English more.

The most important reason why I chose this program is that I found out this had better program than any other schools. I decided, for example I collected catalogues from lots of schools and I asked a lot of teachers about which school I should attend. I found out that ESL on campus had a better program for summer. I changed my mind.

There are the reason why I chose to come to this program this summer. I hope this decision

goes in good way for me.

タイプC 起承転結を用いたエッセイ 10%

例 *I used to be a graduate student in Japan. Usually I am supposed to work out certain company which I chose before. Whereas the company study English abroad.*

My studying abroad was determined in last December. The letter which informed me this decision by the company reached me on December 25. At that time I felt the letter was a kind of Christmas present for me.

After receiving the letter I had to determine where to go for studying abroad. At first, I expected the company gave me an information. But I've got to decided it by myself. To begin with, I tried to determine the company and the area where I should go. And I thought the area which has a comfortable climate would be good for my study. So, I determined to go California...

Therefore, I decided the norht part and I know the teacher in my univerity he used to work in U. C. as a visiting scholor. He advised me to go to kind of urban part because a rural part doesn't give me a lot of entertainment instead of the school

タイプD 書き手の主旨, 論旨が良く分からない。論理の展開がない。 20%

例 *I came to United State five montes ago and I took a class at English Language Program and I studied English in ELP. But I wanna try to study UC campus. I wanna make a lot of friend. There is a lot of Japanese people this season in ELP so I wanna make a chance to sepak English in summer school. It is another reason why my brother has been studying in UC Berkeley and he takes summer school so I wanna study English with brother. It is also good opportunity for me to stuty English.*

I wanna make a effort in this school. Now, I can't speek English well. But in this opportunity I wanna speak a lot of English.

There is a discussion class in summer school I paticurary want to make a effort discussion class.

タイプE 質問に答えていない。書き手の主旨, 論旨が分からない。論理の展開がない。 14%

例 *Nobody will be tired of listening to my story because of my story accesent. I hate to see consused and troublesome people's face. I'm tired of feeling isolated among a group, for example, when my friend and I went to the bar, everybody but me enjoyed talking one another and I just drank beer.*

As a benefit of this, I feel at least comfortable living in the U. S.

7. 日本人学生が英作文をする際抱えている問題

以上の比率からもわかるように、日本語の文章構成の影響を受けている学生が半数近く（タイプBとC, 48%）もいた。タイプBの学生は、英文エッセイの書き方の指導を受け、First of all, Second of all, とパラグラフをはじめ、比較的考えをストレートに表現する英語文章構成の形式を用いようとしている。しかし、最後に結論を書き日本語文章構成（帰納法）を用いている。タイプCの学生は、全くエッセイの書き方の指導を受けたことがない。書くときに文章構成に特に気にしたわけではないそうだが、起承転結調に書かれているといえよう。

このタイプBとCの学生のように、ある程度の考えをもっているが、英文の文章構成を知らなかったり、慣れていないために高く評価されない場合が多い。中には、日本語で文章を書くことは得意だが、英語で書くと低い評価を受け、自信をなくしてしまう学生もいる。

タイプDとEの学生は、日本語でも自分の考えをまとめたり、表現したりすることは苦手のようである。

アメリカの学校では、説得力を磨くためにパブリックスピーキングとかライティングといった授業が数多く開講されているが、日本の学校では、理解と記憶を中心としているので自分の考えを主張し、相手を説得する力を磨くクラスはほとんどない。こうして教育を受けてきた学生は、いきなり説得力のある文章を書くよう要求してもとまどってしまうだけである。

8. 英語教授法への応用

これまでみてきたように、英語と日本語とでは、レトリックが違う。また、日本人学生は自分の意見を自由に表現することに慣れていないため、エッセイを書くことさえも苦手であるようだ。

では、どのような、授業作りをしたら、学生達は、無理なく知っている英語を使える英語に変えていくことができるのだろうか。どうしたら自分の意見を英語のレトリックを用いて、英語を母国語とする読み手に解かりやすく表現をすることができるのだろうか。

エッセイタイプAに分類された学生のインタビューの結果により、英文エッセイを書くときの思考過程を探ってみると、エッセイを書くときにはまず何を書くのかをしばらく頭の中で整理したり、簡単にメモをとったりする。そのあと、英語のエッセイパターンを頭のなかに描きパターンのなかに自分の考えをあてはめていくそうである。

教授法においては、まず、自分で何を書くのかを考える力をつけさせることである。そのあと、日本語と英語のレトリックの違いを解からせ、英語のエッセイパターンを身につけさせることである。そのためには、英文をよみ文体に慣れることが心要だ。その読み物を通してエッセイのテーマを自分でみつけさせることにも役にたつだろう。

また、多くの英語教育学者も、reading と writing のクラスは分けるべきではないと言っている。なぜなら、その2つの技能には、相互関係があるからである。Stotsky はつぎのような

ことを発見している。

1. There are correlations between reading achievement and writing ability. Better writers tend to be better readers.
2. There are correlations between writing quality and reading experience as reported through questionnaires. Better writers read more than poorer writers.
3. There seem to be correlations between reading ability and measures of syntactic complexity in writing. Better readers tend to produce more syntactically mature writing than poorer readers.

従って、文章をかく前に題材を提供するため、読み物を与え、そのなかからトピックを見つけて書かせると効果的である。ここで、文章を書くというプロセスを重視している Ann Raimes のプロセスアプローチを参考に日本人学生向けの文化からくるレトリックの違いを考慮したエッセイの書き方の指導法を次の通りに考えてみた。

1. 日本語と英語で同じトピックのエッセイを読む。
2. 教師もしくは学生自らエッセイのテーマを選択する。
3. 自分の考えをまとめるためフリーライティングをしたりディスカッションをしたりする。
4. 1で読んだエッセイの文章構成を分析し英語と日本語を比較し構成の違いに気づかせる。
5. 英語のエッセイパターンを図を作る。
6. エッセイパターンを参考に、フリーライティングのなかからトピックセンテンスになるものを見つけアウトラインをつくる。
7. ラフドラフトを作り、学生同志でピアリーディングをしたり教師とのカンファレンスをしたりして読者の感想を聞く。
8. ラフドラフト1を修正しドラフト2を作る。6と同様にして読者の感想を聞く。
9. ファイナルドラフトをつくり提出する。
10. 教師は、ドラフト1からファイナルドラフトまでの過程を評価し長所、短所を指摘する。

この指導手順で気づく通り、1から10のプロセスを進める上で書き手中心から読み手中心のエッセイへ発展させていくことが要求される。書き手中心というのは、まず自分が何を言いたいかを考える。そして、読み手中心に変えていくというのは、言いたいことをどう表現したら、読み手に効果的に理解してもらえるかを考えることである。また、読者の感想をきいたり、教師とのカンファレンスでの対話を通して読者を意識しながら何回か校正を重ねていくに従い

理想としたエッセイができあがっていくのである。

おわりに

今まで述べてきたように、外国語で書くと言うことは、違った文化的思考方法が要求される。学生達が、バイカルチャルな認識、意識をもつこと、つまり、英語で書くときには、英文、日本語で書くときには日本文のレトリックを用いることのできるようにすることが望ましい。

もし、エッセイを日本語からそのまま英文に翻訳しただけでは、せっかく日本人の観点からみたすぐれたエッセイでも、アメリカ人の観点から見たら、焦点がぼけていて、主旨のないエッセイだと評価されてしまう。日本語での作文に自信のある学生でも、英語で書かれたものがわかりにくいものと評価され、自信を失ってしまうだろう。

教師の側も、学生に対して、単に「この表現では、アメリカ人には理解されない。」と言う決まり文句を繰り返すだけでなく、具体的にどうしたら、英文的文章構成になるのか、どうしたら、英語を母国語とする人々に受け入れられる文章が書けるようになるのかをプロセスを経て指示をあたえるべきである。

さらに、通じる英語、使える英語が要求されている国際化が進む現代においては、常に、教師自身バイカルチャルな意識、考え方をもち、コミュニカティブな英語への関心を高めていくことが必要なのであろう。

参考文献

- Barnlund, Dean C (1989). *Communicative style of Japanese and American: Images and realities*. CA: Wadsworth Publishing Company.
- Harder, Bruno. (1989). Culture value differences in the stylistic problems of English composition written by Japanese students. Paper presented at the Twentieth International Conference of Oriental, Tokyo.
- Hinds, John. (1979). Organizational pattern in discourse, In T. Gion (ed.), *Syntax and semantics 12: Discourse and syntax* (pp. 135–137). New York: Academic Press.
-(1987). Reader vs. writer responsibility: A new typology. In Ulla Connor and Robert Kaplan (eds.) *Writing across languages: Analysis of second language text*. 141–150. Reading, MA: Addison–Wesley
- Kaplan Robert. (1966). Cultural thought patterns in inter–cultural education. *Language Learning*. 16 1–20
- Reid, Joy M. (1982). *The process of composition*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall.